

# 黒孔雀は囚われる。

純反長幸  
伊祖子久美

R-18





**a bullet.**



黒<sup>くろ</sup>孔<sup>く</sup>雀<sup>じゃく</sup>は  
囚<sup>とら</sup>わ  
れる。  
S  
I  
D  
E  
S

原作  
作画  
・  
伊純  
祖友  
子良  
久幸  
美



この本は「成人向け」です。  
購入者が18歳以上であるという申告の元に頒布しております。  
よって18歳未満の購入、閲覧を禁止します。

内容はすべてフィクションであり、実在のいかなる人物、団体とも  
関係ありません。



「もつと…して  
きもちいい  
痛いこともつと…」







泉<sup>いずみ</sup>どうした

これよし  
之祝<sup>これよし</sup>?

はいよ

おおがき  
大垣<sup>おおがき</sup>さん



せえらんばい  
先輩<sup>せえらんばい</sup>?

んー?

酔<sup>よ</sup>った♡



飽<sup>あ</sup>きないよ?  
俺<sup>おれ</sup>面食<sup>おんじ</sup>いだし

あ!  
そうだ

あーあー  
こいつらに  
そんなこと  
言うから



あんたたち  
職場<sup>しょくば</sup>の同僚<sup>どうりょう</sup>って  
ことは  
朝昼晩<sup>あさひるばん</sup>一緒<sup>いっしょ</sup>  
なんでしょ?

よく  
飽<sup>あ</sup>きないわねえ



黒孔雀は囚われる。

SIDE\_S





こないだ誕生日  
だったんだろ  
泉から聞いた

包装<sup>ラッピング</sup>もなしで  
愛想ないが  
ハンドメイドなんで  
勘弁してくれ

え？ 鐘淵<sup>かねがはち</sup>さんって  
アクセサリーも  
作れるんだ？  
凄い！

半分趣味だけだな



かつこいい♪  
これサンスクリットって  
いうんでしたっけ？

マハーマー  
ユーリーの  
梵字だ



インドの  
神様ですか？

元はな

仏教では厄災と  
苦痛を除く明王で  
……………

孔雀<sup>くわんさく</sup>に  
乗<sup>の</sup>つてる















































……何を  
彫ったの？

髑髏と  
青薔薇

『再生』と『ありう  
べからざるもの』  
って意味がある



ブチ  
鐘淵  
俺帰るよ

先輩遅いし  
なんか邪魔そう



お話中  
すみません

天野俊樹さんに  
ついて何か……

俺  
面識ないんで



そこまで送る

何？  
気持ち悪い

いいから  
送らせろ







お客さん？  
どうされました？



すみません  
もう少し  
行つて下さい

.....

SIDE-Mへ続く

## 「梟は希<sup>ねが</sup>う」

伊祖子久美

先日、久々に家族三人揃ったとき、お袋が生まれ故郷のロシアの永久凍土から発見されたミイラを見て来たのだ、と語った。親子でレストランで飯を食いながら古代人のミイラやら骨の話はどうかと思うが、人類学者であるお袋にとつては日常会話だ。古代において、非常に高貴な存在であつたと思われる二十代の女性と、その護衛役として殉死したと思われる戦士のミイラが発見され、その肌には精緻なタトゥーが施されていたのだと言う。

「素晴らしかったぞ。見てみたいだろう？」と、お袋は興奮気味に言つた。

二千五百年前のタトゥーのデザインは興味深いが氷漬けのミイラの皮膚に残つたものは余り見たくない。タトゥーは瑞々しく息づいている肌にあつてこそそのものだと思ふ。

「タトゥーというものは、古今東西、どの時代、どの地域にでも文化として存在している」

知つてゐる。釈迦に説法だ、俺は彫師だぞ、と言つたが聞いちゃいない。

タトゥーは、ときに敵対する存在への威嚇であり持ち主が所属する共同体での地位の証明であり、刑罰であり、装飾であり、信仰や憧憬や思想を示すものでもある。

俺の客の中で、そのうちのどれでもない理由でタトゥーを入れた奴がいる。

泉がタトゥーを入れてみたいと思つた動機は「針や鑿で皮膚を刺されるのってどんな感じなんだろうって思つて」だつたらしい。

綺麗な顔をして、奴は真性のドMで、ド変態だ。そして、身体はMだが、精神的には、人を惹きつけて振り回した挙句に地獄に蹴落とし、それを見て楽しんで笑う性質の悪いドSだ。

何年か前、男に道端で土下座され「捨てないでくれ！ 一体、私は君にとつてなんだつたんだ！」と泣き喚かれた泉は、愉悅の表情を浮かべて言い放つた。

「期待してたのに小さかつたし、あんまり気持ちよくなかつたし、もう飽きた。バイブの方がまし」その後、界限で見かけなくなつたが、あの男は無事に立ち直れたんだろうか。

泉が俺を友達扱いする理由はよく解らない。が、少なくとも、バイブと機能を比較される使い捨ての男よりは、まだましな存在だと思う。

泉は、いつも突然訪ねて来る。

この間も、新宿で買ひ物をしたついでと言つて俺の自宅兼スタジオにやつて来た。

デパートのロゴ入りの手提げの紙袋を二つ持つていて、そのうち一つは俺への手土産の生ハムだつた。後でビールのつまみにしたらめっちゃくちや美味かつた。



もう一つは？　と尋ねると、大垣への誕生日プレゼントだと言った。

訊くんじゃなかった。

「内緒にしてよう？　俺、大垣さんの誕生日知らないことになってるんだから」

あいつに、まっとうな恋人が出来て、サプライズでプレゼントなんて普通のことをするようにするのは思わなかった。

最初は、容姿こそ悪くないものの、こんな素人くさいガキ——実は泉と同じ年だったが一——で、泉が我慢出来るのかと思っただもんだった。

「悪い虫は騒がないのか？」

そう尋ねると、泉は折角入れてやったコーヒを一口飲んで不味い、と言いやがった後で問い返した。「悪い虫？」

「クソビッチがおとなしいから病気かと思うだろ」

「ん？　俺は相変わらず自他共に認める淫乱<sup>ビッチ</sup>だけどう？」

他人はともかく、自分で認めるなよ。どうしようもねえな、こいつは。

「隠れて遊んでんのか。まあ、そうだろうとは思ったけどあいつには見つかるなよ。ありや多分キレるタイプだし、ノンケで素ッ堅気のエリート様の人生をめちゃくちゃにしてやんなよ」

「他とは遊んでないよ。之祝一人で間に合ってるだけ」

……あの坊やのバイブとしての機能もお気に入りな訳か。双方お幸せで結構なこった。惚気るだけ惚気て、泉は帰って行った。

大垣は泉が引つ掛けた男の中じや一番だ。何度か一緒に飲んで、気のいい奴だと解った。

俺のように年中深酒をする訳じゃないから余り知られていないが、泉は見かけによらず酒には強い。一晩中飲んでも泥酔することは滅多にない。

奴の男関係を中心に散々苦労させられながらもなんだかんだで長いつきあいになったのは、泉が朝まで俺につきあつて飲める数少ない相手だからかもしれない。

その泉が、大垣と一緒に奴の肩にしなだれかかる。

初めて三人で飲んだ居酒屋でも、泉は大垣に凭れて「酔った」と言っただ。その割にペースは落ちないし話す内容も普通だ。

真に受けて心配した大垣に「大丈夫か？　烏龍茶にしとけ」と言われて「やだ」とか駄々を捏ねてる。

酔ってるはずがない。俺と一緒にボトル数本空けて平然としている泉が、一軒目のビールの二杯や三杯で酔う訳がない。……いや、酔ってるか。うつとりとためいきなんかついて別のものに酔ってる。

大垣は本気で心配して「気分悪いか？　もうやめとけ」と言い、泉は御機嫌で「いいだろ。限界まで飲んで、あんたが一緒なんだし」と、俺なんかそっち

のけでいちやついて——と思つたら、大垣に寄りかかったまま、俺を見てた。

「羨ましいだろ？」とでも言いたげな自慢らしい笑みを浮かべてくすくす笑う。

そして、酔つ払つたふりをして泉は言つた。

「俺、女に生まれた方が良かったかなあ？」

耳を疑つた。泉は生粋混じりつけなしのゲイで

女役だが、女装もしないし、女言葉を使つたのを聞いたことさえ一度もない、男として男が好きな男だ。

問われて大垣は「なんで？」と訊いた。

「あんたノンケだし」

「男でいいよ。……お前が女なら俺は本当に最低じゃねえか」

大垣と初めて逢つたとき、泉は「この男に脅迫されてる」と言つてたが、泉がそんな玉な訳はない。嫌いでない限り誰とでも寝るが、鬱陶しいと思つたが最後、泉は一瞬たりとも我慢なんかしない。

気に入つた男を落とすためには何処までも媚びて口説くが、短ければ一晩、長くても二カ月ほどで飽きて、あつさりど振る。それ以上長続きのしたのを見たことがない。

別れたがる泉に、往生際悪くつき纏うようなら俺の出番だ。

泉から「ねえ、鐘淵。助けて」と連絡が来なかつたつてことは、間違いなく状況を含めて楽しんでゐたはずだ。

しかも、俺に『彼氏』だと紹介した。

こんなことは今まででなかつた。

——誕生日か。

俺は、抽斗を開けて小さな銀粘土の塊を取り出した。何カ月前に、自分用の指輪を作つた後で残つた

分だが、幸いまだ乾燥していなかつた。

孔雀は、西洋では墮落と驕慢を象徴し、中東の山岳民族は人を救うために神に叛いて地に墮ちた天使として敬い、仏教では破邪を意味する。

銀粘土を木篋で伸ばし、スパチュラで成型し、表面に

孔雀明王を意味する梵字を入れた。

人々の厄災や苦痛を取り除くとされる孔雀明王は

荒々しい憤怒の表情の明王の中で唯一慈悲深き菩薩の貌をしている。

梵字だけでは少しシンプル過ぎる気がしたので

一番小さいスパチュラで孔雀の羽根を作り、罫書き針で引つ掻いて模様をつけ、オープントースターに入れて焼成した。

大垣が気のいい奴なのは確かなのに、時々ムカつくのは俺が泉から受け取り損ねたような気がして

ならないものを全身に浴びてゐるせいだろう。

泉は友達でいる限り義理堅い奴だから、奴にも愛情は多分あると思つていたが誠実や献身があるとは知らなかつた。

泉は幸せそうだ。

大垣は情が深くて見場も悪くない。多分、泉が今のところ大垣に対して誠実でいられるのは、大垣自身が泉に対して誠実だからだろう。泉とつきあうのは苦労が多いだろうが、出来るだけ長く幸せであるとい

金を取って商売でやってることだし、そんな柄じゃないのは百も承知だから口に出しては言わないが、俺はタトゥーを彫るときには持ち主の護符たれと願っている。

俺が秘かにこれまでに俺が彫った中では一番いい出来だと思ってるあの黒い孔雀のタトゥーは当初は殆ど意味のないものだった。今は、大垣が気に入ったために、泉にとって大事で特別なものになったらしい。

大垣は悪くない男だ。だが、泉と別れる日が来たら、やつぱり俺は泉の味方で、必要なら奴も殴るんだろう。オーブントースターのタイマーが鳴った。後は磨くだけだ。  
いつもの店<sup>モ</sup>で逢ったときにでも大垣に渡そう。

【了】

## 黒孔雀は囚われる。 SIDE-S

発行:2014年03月09日

作画:純友良幸  
原作:伊祖子久美

発行:a\_bullet.

[http://homepage2.nifty.com/cafetap/  
plastick.dog@gmail.com](http://homepage2.nifty.com/cafetap/plastick.dog@gmail.com)

伊祖子久美さまのブログ  
「雑音集積所」

[http://iso5kumi.blog.fc2.com/  
cantarella17@excite.co.jp](http://iso5kumi.blog.fc2.com/cantarella17@excite.co.jp)

印刷会社:株式会社ポプルス





# 君を見る 染井吉野

「黒孔雀シリーズ」番外編

伊祖子 久美

俺の部屋に来るようになってからも、泉の方は何が変わったというのはない。

変わったとするなら俺の方だろう。

毎日使う最寄駅で降り、スーパーかコンビニに寄ってビールとつまみと、弁当を買って帰る。そんな普通のことなのに泉と一緒にいただけで息が苦しい。

それは勿論、嫌な訳じゃない。

生まれたばかりの仔猫を掌に置いたような気分だ。

思い切り抱きしめたり頬ずりしたりしたいけど、そうしたら猫が苦しんだり嫌がったり逃げたりするかもしれない。

それ以上に、下手に力を入れ過ぎると殺してしまうんじゃないかと思うから、手の中であたためて指先で耳の間や喉をそっと撫でるだけで我慢してるときに似ている。

泉とは普通とは違うきっかけでセックスする仲になった。好きだと言ったのも、唇にキスするようになったのも随分経ってからだった。一緒に飲みに行ったり、休日に遊びに行くようになったのは最近だ。

泉は俺が好きだと言うと喜ぶ。

けれど泉の態度は「いいんだよ、いつ別れても。都合が悪くなったときにはいつでも」と言っているように思えてならない。

泉が俺を友達に見せびらかしたり、殊更に俺に甘えたりするのは、いつか来る終わりを見ているから——そんな気がしてならない。

別に雑に扱われてる訳じゃない。寧ろ、泉は、これまでつきあったどんな女の子よりも気遣ってくれてる。俺が泉を大事にしようとする以上に細やかに、その癖さりげなく気遣ってくれるから、意識して優しくしよう、喜ばせようとする自分が無様なような気さえする。

たとえば、泉がしてくれるように、喉が渴いたと思ったらコーヒーをそっと置き、退屈だと思ったときにネットで拾った爆笑動画を送り——そして、ベッドの中で、ときにはして欲しいことをもう十分過ぎるというほど、別のときには、想像もしたことがないほど新鮮なことをしてやれるような恋人になりたい。

不意に、泉は反対側の歩道に目を遣った。

「綺麗だね」

フェンスの向こうには小さな児童公園がある。

休日の午前中から子供が大声で笑ったり泣いたりして、朝寝を邪魔されるが、夜には誰も出入りしない。

ささやかな外灯に桜が浮かび上がっていて、花びらが絶え間なく散っている。風がなくても桜は零れるように散るものらしい。

「桜も、もう終わりだね」

泉が言った。

この春はなかなか来なかった。四月に入っても冬はしつこく居座り続けて、やっと咲いた桜なのに、もう散り終わってしまおうとしている。

「最後のお花見してく？」

泉がそう言ったので、公園のベンチに座って、音もなく降りしきる桜の下で冷えたビールの栓を開けた。

泉は俺の頭のとっぺんに落ちた花びらをつまんで、指先をふっと吹いてそれを飛ばした。

泉の髪にも花びらが留まっている。

取ってやろうと思ったが、艶のある真っ黒な髪にとまった淡いピンクの花びらが綺麗なのでやめておいた。

どうせうちに着いたらシャワーを浴びるんだ。このままでいい。

「綺麗だね」

頭上を見上げて泉はまたそう言った。

ビールを一口飲んで、泉は俺の方を見た。

「俺の顔見てどうすんの？」

ああ——見惚れてた。

「桜、明日には全部散っちゃうよ？」

泉は笑う。

「いいよ。来年咲いたらまた見るから——お前と一緒に」

それは当然のことだという風に軽い調子で俺はそう言った。

泉が重いとか鬱陶しいとか感じないように、努めて自然に、さりげなく——そう聞こえているだろうか？

俺は、来年も、再来年も、ずっとずっと先までお前と桜を見たいんだ——そう言って抱きしめてキスして、お前もそう思ってるだろう？

思ってくれ、と叫びたいのを堪える。

今は、なんでもないことのように響いているといい。

「——綺麗だね」

うっとりとして、幸せそうに俺の肩に凭れて、泉はまた言った。

【了】